

<https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/list/setonaikai/>

瀬戸内 Story

SETONAIKAI
NATIONAL PARK



発行 環境省
2025.3

瀬戸内海国立公園とつながる



笠岡諸島
寄島

はじめに

「国立公園」と聞いてどんな場所を思い浮かべますか？

原生林が広がり、野生動物がすんでいるようなイメージがあるかもしれません。

日本を代表する自然の風景地として国が指定している国立公園は

森林、農地、集落など多様な環境が含まれていることが特長です。

ほとんど手つかずの自然が残されているところがある一方で

自然と人の暮らしが織りなす地域の歴史や文化に触れることができます。

見渡す限りの青い海、そこに大小無数の島々が浮かぶ美しい景観。

多くの地理学者たちが「世界で最も魅力的な場所」として称賛した瀬戸内海は

日本第1号の「国立公園」に指定された景勝地でもあります。

古くから国内外を結ぶ航路として栄えてきた瀬戸内海の島々や港町など

自然と人の暮らしが共存する、どこか懐かしさを感じる景色は

時代とともに景観が移り変わっても、今もなお愛され続けています。

“瀬戸内Story”は、瀬戸内海国立公園とつながる人々が抱く思いや

その原点となっている「自然と人が共存する」雄大な景色に触れ

まだ気づいていないかもしれない、新たな魅力を発掘します。

この地域に魅了された人たちの言葉を紡ぐことで

地元について改めて考えるきっかけが生まれ

見慣れたはずの光景に心が揺さぶられるかもしれません。

一人ひとりのStoryからあふれる瀬戸内への愛着。

“瀬戸内Story”を通して、皆さまの人生が

より豊かなものになりますように。

瀬戸内海国立公園

輝き続ける島と海 -自然と暮らしが調和する内海多島海景観-

瀬戸内海国立公園は、1934(昭和9)年に雲仙・霧島とともに

日本で最初に国立公園に指定されました。

備讃瀬戸を中心に紀淡・鳴門・明石・関門・豊予の5つの海峡に囲まれた地域のうち、

広い海域とそこに点在する島々、それを望む陸地の展望地が公園区域として指定されています。

その範囲は1府10県にまたがり、海域を含めると90万haを超え、国内で最も広い国立公園です。

特長は、大小数々の島で構成された内海の多島海景観です。

沿岸の陸域にはそれらを眺められる展望地が多数存在します。

また、瀬戸内海一帯は早くから文化が栄え、人と自然とが共存してきた地域であり、

島々の段々畑や潮待ちの港町など、自然と暮らしが一体となった

親しみやすい景観であることも大きな特長の一つになっています。

〔指定〕昭和9年3月16日

〔面積〕67,280ha(陸域) 837,541ha(海域)

〔関係都道府県〕大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、広島県、山口県、
徳島県、香川県、愛媛県、福岡県、大分県



鷺羽山(岡山県倉敷市)



鳴門の渦潮(徳島県)



紫雲出山(香川県)



法王ヶ原(愛媛県)

穏やかな瀬戸内海に浮かぶ笠岡諸島

人々の暮らしと自然が融合する展望地寄島へ

大小約30の島が連なり、多島美が人々を魅了する笠岡諸島。今回訪れたのは、砂浜で踊る神秘的な「白石踊」の地としても知られ花崗岩が露出した自然景観が美しい白石島。さらに笠岡湾のカブトガニ繁殖地に隣接している博物館でその保護活動や魅力に触れます。その東側には瀬戸内海の多島美を望む幻虹台があり、浅口市の青佐山、寄島園地からも絶景を堪能。さまざまな形で文化を継承し、海を守り、国立公園に携わる人に出会ってその想いに耳を傾けます。まさに文化と自然が織りなす瀬戸内の魅力を体感できる特別な場所。ぜひその奥深い魅力に触れてみてください。





あまの だし

天野 正さん

白石踊会理事

—— 歴史と自然の魅力にあふれた島で、「白石踊」の保存に取り組む天野正さん。
ユネスコ無形文化遺産に登録され、民俗学的にも貴重な踊りを次世代につないでいます。

人の営みと自然が調和した島で受け継がれた踊り

笠岡諸島で2番目に大きい白石島は、古来沿岸航路の中継地として栄えたんです。オランダ商館のケンベルというお医者さんが将軍に拝謁に行く途中で立ち寄って、「白石港は比類なきほどの投錨地（船の停泊地）」と日記に残しているの、潮待ち、風待ちの良港だったと思います。昔から今に至るまで、人々の営みと自然が調和していて、この点でも国立公園にふさわしい場所なんだと思います。そんな風土の中

で受け継がれてきたのが「白石踊」です。白石踊の由来として、平安時代末期の源平水島合戦で命を落とした兵を弔うために始めたという説がよく知られていますが、私は塩飽諸島の念仏踊りが伝わってきたのではと考えています。昔から海を介した交流が盛んな地域ですからね。江戸時代の文章を読むと、いろんな文人墨客が立ち寄っているのが分かります。海を通じて人々が交流し、文化が伝承されているのが、瀬戸内海国立公園の大きな魅力だと思っています。

profile 1945年岡山県笠岡市白石島生まれ。近畿地方の製紙会社で2年間勤務したのち21歳のときに帰郷し、祖父の代から続く回漕業に従事。本土と笠岡諸島を結ぶ三洋汽船の代理店として、2013年まで乗降客への切符の販売や物の積み下ろしなどを担ってきた。白石踊の保存活動をはじめ、白石公民館長を20年以上務めるなど地域活性化に尽力している。

瀬戸内海の歴史や風土に育まれてきた踊り
島の自然や文化とともに次世代へ伝えたい

一つの音頭に合わせていろんな振りが付く

白石踊の一番の特徴は、一つの太鼓と音頭に合わせて、いろんな種類の踊りが繰り広げられることです。全部で13種類の振り付けが残っていて、男踊は勇壮、女踊はしとやか、というふうにそれぞれ特色があります。私たちの先輩なんかは、お盆の時期は朝まで踊って、寝る間もなく仕事をして、日が傾くとまた浜で踊って…。これを3日3晩くらい繰り返していたそうです。当時は今と違って楽しみが少ないから、お盆のときくらいは羽目を外すのも仕方がなかったのかもしれない。太鼓がうまい人や、上手な音頭取りが上がると、ワッと人が集まって輪が二重三重にできるんですよ。男性はかっこよく踊ったり音頭の声を鍛えたり、女性はきれいに踊って目立とうとしていました。踊りが自分をアピールする唯一の場だったからこそ、長い時間をかけて習俗として磨き上げられ、瀬戸内海の小さな島に今も残っているのだと思います。

私が幼かった戦後間もない頃は、露店が通りに出るほどのにぎわいで、踊りの好きな家の子どもは、おばあちゃん、おじいちゃんに教えてもらっていました。親父さんに肩車してもらい、大人と一緒に輪に入っていた子もいましたね。みんな幼い頃からリズム感を覚えているから、すんなり踊りに入っていけるんです。就職で2年間ほど島を離れていたんですが、21歳の頃に島に戻って、地元の青年団に参加。そこから白石踊に本格的に携わるようになり、やぐらの組み方とか、お盆の飾りなどについて、先輩たちから教わっていきました。当時は踊り手も多かったのも、一番にぎわう午後8時ごろの“ゴールデンアワー”には、私たちのような駆け出しがやぐらに上がったり、太鼓を打ったりはできず、できるようになるのは深夜近くでした。昔のことですから上下関係が厳しいので…。日付が変わって誰もいなくなってから、若い仲間だけで踊ったこともありますよ。古老たちの目も肥えていて、「この子は手つきがええ」「音頭取りの節はええけど声は汚ねえ」と、思い思いに批評するんです。これはかなわないと思い、自分の気に入った踊り手の後ろに付いて、必死で真似て上手になっていきました。



白石踊の様子。写真は男性的で、ダイナミックな「男踊」。



若い女性が踊る「娘踊（月見踊）」。女性的なやさしさを活かした踊りです。



島外から注目され、大阪万博などで公演を重ねる

明治生まれの人から聞いた話では、かつての白石踊は、今のように遠くから見物客が来ることはなくて、来たとしても他の笠岡諸島の住民が見に来るぐらいだったそうです。脚光を浴びだしたのは、昭和になってからのこと。1928年に白石踊会の前身となる白石踊回向(えこう)団を結成して、その年に開かれた地元新聞社主催の盆踊り大会に参加し、初めて島の外で披露しました。そこで見事1位を獲得したんです。翌年も連覇を果たして、そこから民俗学者や郷土芸能の専門家の注目を集めるようになりました。島の中だけで洗練されていた踊りが急に外に出たものですから「こんな珍しいものが残っていたんか」と驚かせたでしょうね。

今に至るまで、さまざまなイベントで踊っているんですが、特に印象に残っているのは、1970年の大阪万博です。約100人の島民が繰り出して、会場内のお祭り広場で円舞しました。最高齢は80代で、一番下の子は17歳くらいだったかな。私は25歳で、踊りが上手だったというより青年団活動に精を出していたということで選抜されたんだと思います。最近では、おかやま民俗芸能フェスティバルや笠岡市の芸能祭、生涯学習フェスティバルなどにも参加しています。2024年度のおかやま民俗芸能フェスティバルは浅口市寄島町で開かれ、12人の踊り手と太鼓、音頭取りがステージに立ちました。

50年近く前は、今よりもっと多くの観光客がこの島を訪れていて、旅館や民宿もずっとたくさんありました。観光客向けに何かできないかということで、白石踊会のメンバーたちが夏の毎週土曜日、夕方から披露することになりました。当時の宿にはベッド付きの個室なんてないので、お客さんたちに踊りを見てもらっている間に、宿の人たちは食事を片付けて布団を敷いてましたね。島ぐるみのおもてなしが、当時から息づいていました。一方でその頃、島から若い者が出て行ったり、核家族化が進んだりして、私の子どものときのように家庭で白石踊が伝承されていくことが難しくなっていました。そこで、子どもたちに運動会で踊ってもらったりして、学校教育の中に取り入れるようになったんです。最初は全ての振りの基本形となるブラブラ踊から覚えて、そこから男の子は笠を持つ笠踊や、キレのある動きが特徴の奴踊などを習います。女の子は娘踊の他、扇踊や二つ拍子が人気でした。やはり扇など小道具を持つのが好きなんでしょうね。底引き網などの漁業を体験するためにやってきた他校の修学旅行生たちにも披露していましたよ。

島育ちの若者や島外の人に文化や踊りを伝承

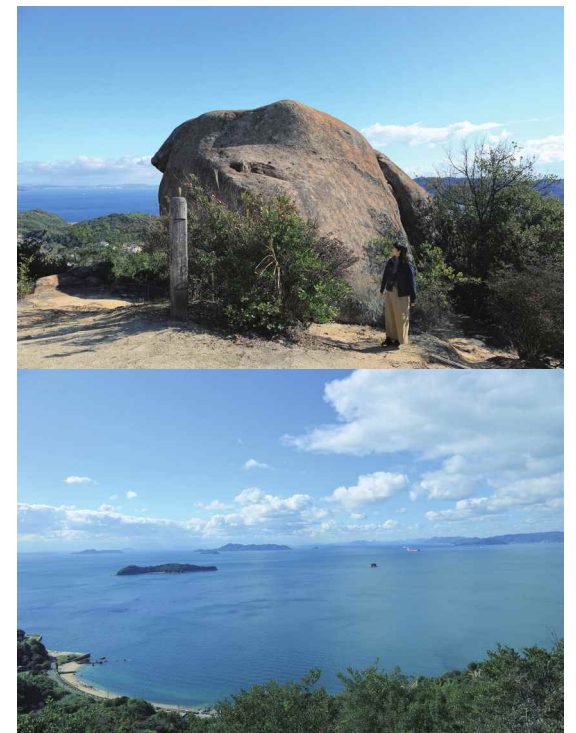
白石島には開龍寺という、巨石の下に建てられたお堂で有名なお寺があります。そこにはお釈迦様の骨がまつられているタイ式の仏舎利塔(ぶっしゃりとう)があって、それが縁となって1982年にタイ王国のラッタナーコーシン王朝の建国200年祭で踊ることになりました。このときは若いメンバーを集めるのに苦労しましたね。海外まで行くような時間的余裕なんて若い人にはないですから。そこで仕方なく、当時60代だった私のおふくろが娘踊を披露しました。あれから40年が経ちましたが、娘踊をしてくれる若い女性は島にはいません。古い時代から今まで、白石踊を代々きちっと守ってきたのは私たちにとっての一番の自慢ですが、高齢化が進んでいくにつれ、担い手の確保が難しくなっているんです。そんな中で頑張ってくれているのが、島育ちの若者たちです。進学や就職で島を離れていても、毎年お盆になると帰省して、踊りの輪に加わってくれます。島の外で披露するときもお互いに声を掛け合って参加してくれるんです。幼稚園



から小学校、中学校で踊り続けてきた子たちなので、いつ本番があっても準備OK。踊りだけでなく、お祭りのみこしも担いでくれたり、お盆の飾りの片付けも手伝ってくれたりします。年寄りが高いところに登るのは不安なので、本当に心強いですね。白石踊会としても、島にゆかりのない人を対象にした後継者育成に力を入れるようになりました。2017年に踊会の笠岡支部を作って、笠岡市中心部の中央公民館で月に2回練習会を開いています。習いたい人は誰でも来てもらってよくて、未経験者も大歓迎。高校生の会員もたくさんいて、一生懸命習ってくれています。この他、島で宿泊するのが難しい人向けに日帰りの鑑賞体験ツアーも行っていて、東京から参加される方もいます。最近では大学の卒業研究で白石踊をテーマに選んだ学生さんを案内することもありますね。民俗学的に貴重なものなんだなあとあらためて実感し、しっかり未来に伝えていかなければと気が引き締まる思いです。

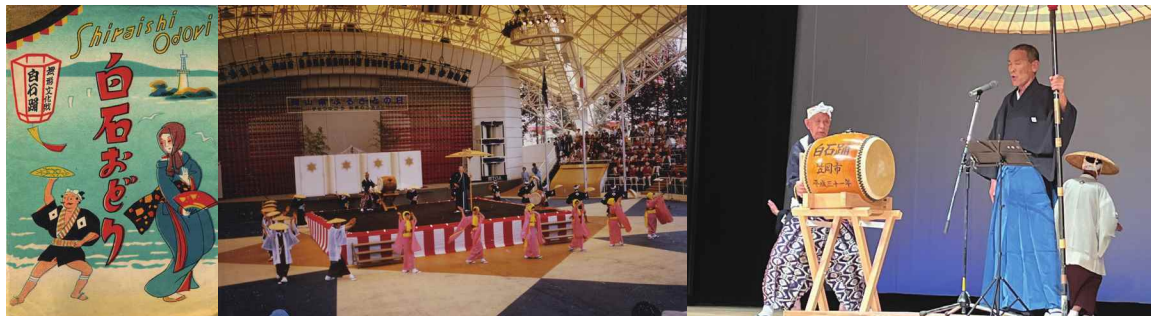
マリンスポーツや奇岩など、海と山が楽しめる島

白石島の特徴は、海と山、どちらも楽しめること。今でも夏場は海水浴客で賑わっていて、シーカヤックに乗っている人や、大きなボードの上に立ってパドルで水面を進むサップを楽しんでいる女性もよく見られますよ。トレッキングコースも設定されていて、1時間少々で終わるものから3、4時間ほどかかるものまでいろいろあり、体力に合わせて選べます。私もガイド役をしていて、この間なんかは30人近い小学5年生を大玉岩や鎧岩とかに案内しました。島全体を見渡すことが



白石島の大玉岩と、笠岡諸島を見渡せる雄大な景色。

できるんで、もう島を征服したような気持ちになっていましたね。長い人だと半月くらい滞在することもあります。宿泊施設の白石島国際交流ヴィラはインターネットの環境が整っているの、ワーケーションで訪れる人も増えているんです。



左から白石踊の旧絵葉書、1970年開催の「大阪万博」、2024年開催の「おかやま民俗芸能フェスティバル」の様子。

そんな人たちのために、公民館では機織りなど、文化や産業を体験するメニューを用意しています。江戸時代に干拓が進められ、昔から塩分が強い土壌でもよく育つ綿花の栽培が盛んなので、それぞれの家で機織りが行われていたんです。古い家から譲り受けた織機や糸車を使い、手紡ぎや手織りも体験してもらっています。実際に体験してもらうことで、魅力をよりいっそう伝えられると考えていて、今後は休耕地を活用した農作業体験なんかがあってもいいかもしれません。

瀬戸内海国立公園の良さをもっと体感できるようにするには、島相互のアクセスを充実させることが必要だと思っているんですが、今笠岡諸島の交通は、笠岡市本土を結ぶ旅客船とフェリーしかないんですよ。これを昔の北前船のイメージで、瀬戸内海を島伝いに縦断していく航路を開設してほしいと思っているんです。インバウンドの観光客が増えているので、世界に誇れる多島美の魅力がもっと広がってくればと願っています。



公民館では昔ながらの糸車を使った手紡ぎや手織りの体験も。

PICK UP

白石踊 Shiraishiodori

「白石踊」は、笠岡市の白石島に古くから伝わる、国指定重要無形民俗文化財の盆踊り。新暦の8月13日から16日の夜に、島北部の浜辺などで、音頭取りと太鼓打ちを囲むように円舞します。一つの口説き（音頭）に合わせ、衣装や所作の異なる何種類もの踊りが繰り広げられるのが大きな特徴。勇壮な男踊、しとやかな女踊、扇を持った二つ拍子、娘踊（月見踊）、笠踊、奴踊、扇踊など13種類の踊りがあり、さまざまな振りが同じ輪の中で調和を生み出すさまはとても見応えがあります。2022年には全国40件の踊りとともに「風流踊（ふりゅうおどり）」としてユネスコ無形文化遺産に登録されました。真庭市の大宮踊、高梁市の備中たかはし松山踊りと並び、岡山県に伝わる三大盆踊りの一つに数えられています。



白石島の砂浜の上で踊る「白石踊」は、沈む夕日や美しい瀬戸内の海と合わさり、とても幻想的な雰囲気です。伝統文化として島で代々守り続けられてきた踊りは優雅でありながらもとても力強く、見る人を魅了します。

白石踊を受け継ぐ人

人の温かさが残る“自慢の島”の伝統を守りたい

幼・小・中と白石島の学校へ通学して、高校は旅客船で笠岡市本土の学校に通いました。看護を学ぶために大学進学したのを機に、本土へ引越しましたが、島を離れても、白石踊を盛り上げ、未来に伝えるために、今もさまざまな場所で踊り続けています。島で育った幼なじみでグループLINEを作成していて、踊りの公演が入ると正さんから「この日に来られる？」と連絡が入るので、お互い誘い合って、なるべく多くの人に参加できるようにしていますね。ユネスコ無形文化遺産に登録されてからは島外での公演が相次いで、私たちに声が掛かる機会も増えているように感じています。踊りに参加するようになったのは、大学で白石踊に関する研究をしていた姉の影響が大きいです。島の公民館で卒論を発表する姿を見て、私も伝統文化に携わりたいという思いが強くなりま



川崎医療福祉大学 2年生

天野志保さん

した。踊り以外のイベントにも参加していて、姉の友人と一緒にお祭りの神輿をかついだこともあります。

白石踊は幼稚園から小学校、中学校までずっと踊っていました。運動会や学芸会、お盆など、一緒に頑張ってきた幼なじみたちは、もはや家族や兄弟のような存在。久しぶりに会っても、息ぴったりに踊れます。学校の校庭など、みんなで集まっていたところに行くと、今でも当時の思い出がよみがえってきます。

今も祖父母が住んでいる島へは、毎週のように帰っています。一番の魅力は、人の温かさ。小さい頃から今に至るまでごくかわいがってくれたんです。看護師を目指そうと思ったのも、島のおじいちゃん、おばあちゃんがきっかけ。島にはかつて民間の診療所がありましたが、2015年に閉鎖され、医療サービスが届きにくい高齢者に少しでも貢献したいと思ったからです。私より3歳下の子が白石中学校の最後の卒業生で、それより下の世代はいないんです。それだけに「伝統を守んなきゃいけない」という自覚はみんな強いですね。また島に戻って生活するのは難しいかもしれないし、故郷のために大きなことはできないかもしれませんが、それでも、将来もし自分の子どもができれば「この島がお母さんの自慢なんだよ」と島の魅力を伝えられるようにしたいと思っています。



島で育った天野志保さんは、島で暮らす人はみんな家族のように感じているのだそう。島を離れた今も、小さい頃から踊っていた白石踊をこれからも踊り続けることで、自分達よりも若い次世代に繋ぎたいと活動を続けています。

白石島

笠岡諸島にある風光明媚な島。
夏には海水浴を楽しむ人も多く
お盆に行われる「白石踊」は
国指定重要無形民俗文化財。
奇石や巨石などの見どころも点在。
展望台からは瀬戸内海の島々と
雄大な景色が一望できます。



白石島には巨石や特徴的な岩が点在。
「はと岩」と「大玉岩」には足をかけるく
ぼみがあり登ることもできます。体力に
自信のある方はチャレンジしてみてください。



白石島海水浴場



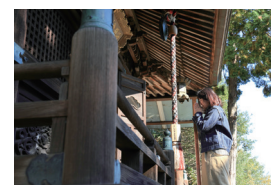
高山魚見台の岩の上から見渡す笠岡諸島の眺めはまさに絶景！



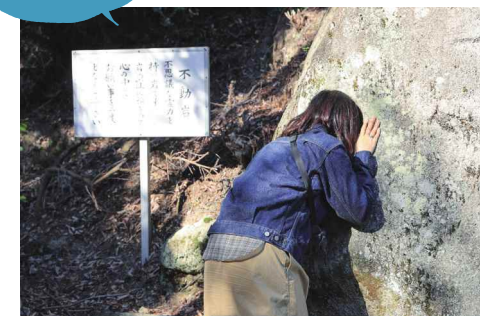
基盤の目のように割れ目が入り鑑に似ているのが名前の由来。国指定天然記念物です。

開龍寺

平安時代の終わりに源平水島合戦による戦死者の霊を慰めるために創建。弘法大師が唐の国から帰る際に立ち寄り、修行を行ったと伝えられている「大師堂」は巨石の下に建てられており、その姿はとても荘厳な雰囲気をかもししています。また、パゴタと呼ばれるタイ式の「仏舎利塔(ぶつしゃりとう)」にはタイの寺から奉納された仏舎利(お釈迦様の骨)がまつられています。



願いが叶う
パワースポット



願いが叶うと言われる不動岩。岩のくぼみに額を当てて、願い事を3回唱えます。

登山道からの眺めにも癒やされます





もりのぶ さとし

森信 敏さん

笠岡市立カブトガニ博物館 館長

2億年の時を超えて生き続けるカブトガニ
当たり前に見られるまでに増やしたい

—— “生きている化石”カブトガニの保護や研究に取り組み、展示やイベントを通じて生態の面白さや不思議などを発信している森信敏さん。人工飼育・放流といった保護活動や、カブトガニが生息する海の景色について語っていただきました。

観光客を引きつける“マニアックすぎる”展示

カブトガニ博物館は、世界で唯一のカブトガニをテーマにした博物館です。かつて「カブトガニ保護センター」というのがあったのですが、当時は学術的な研究が中心で、一般への展示はあまり考慮されていなかったんです。バス会社からもらってきたお古の車両の中を改造し、そこを展示スペースにしていたそうですよ。もっと一般の人に知ってもらう必要があるんじゃないか、ということで、1990年に今の施設ができた

んです。私が学芸員として入ったのは、開館から6年後の1996年で、大学4年のときに実習で訪れたのがきっかけでした。大学院1年のときに「空きがあるから受けてみたら」って連絡もらったのですが、このときはちょうどサメの研究をしていたので無理でした。ご縁がなかったな、と思っていたら、翌年にもう一回学芸員の募集があって、入ることになりました。

profile 1970年里庄町生まれ。大学院修士課程修了後、1996年に笠岡市役所に入庁し、カブトガニ博物館学芸員などを経て2020年より館長。カブトガニの個体数増加に向け、幼生の人工飼育や放流に取り組むほか、生物観察会や博物館グッズの作成などを通じて情報発信を続けている。

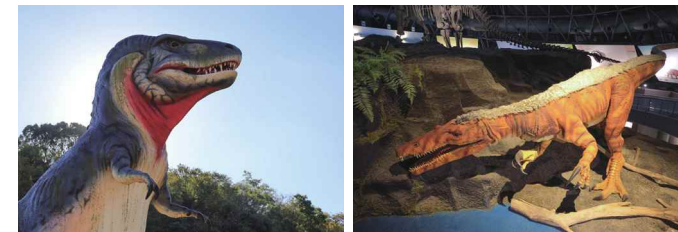
館内には変わった展示をたくさん置いています。カブトガニ1匹分のエラ約1200枚をすべて貼り付けたものや、卵の中でカブトガニの幼生が後ろ向きにくるくる回る様子が分かる模型、ドイツ南部のゾルンホーフェンから出てきたカブトガニの這い跡の化石など、マニアックすぎるかもしれませんが、不思議なことにこのほうがお客さんに喜ばれるんです。一方で子どもたちの興味を引かなければいけないということで、カブトガニと同じ時代を生きた恐竜についても紹介しています。実物大の恐竜の模型を置いている博物館はなかなか、ティラノサウルスの頭骨のレプリカを間近で見られるのは他にはないんじゃないでしょうか。隣にある恐竜公園にも親子たちがたくさん訪れています。2019年に開館以来の入館者数が200万人を超えましたが、最大の功労者はこの恐竜たちかもしれませんね。

潮の流れが変わり、生息環境が急速に減少

カブトガニの主な食べ物は貝やゴカイです。一応ハサミがあるのですが握力がとても弱く、挟まれても全然痛くありません。だから割れやすい貝を食べているんじゃないでしょうかね。ゴカイは泥と一緒に捕食しているようで、うんちを調べてみると食べ物は見当たらず泥ばかりということもよくあります。産卵期のカブトガニが抱えている卵は2万個とも、2万5千個とも言われますが、このうちどれくらいがふ化するのかなど、詳しいことは分かっていません。まだまだ謎は多く、それだけに研究の価値がある生き物だと思います。脱皮を繰り返して10年かけて成体になるのですが、ここまで生き残るのは多くて4匹くらいで、ほとんどが他の生き物に食べられてしまいます。卵を産むのは砂浜で、特に汽水域のところを好んで産卵し、生まれた赤ちゃんは砂から這い出て干潟へ移動して暮らします。笠岡湾一帯にはカブトガニがたくさん生息していて、かつて湾の奥にあった生江浜（おえはま）という場所が繁殖地として天然記念物に指定されていたんです。干拓事業が始まったのは1966年で、私が物心付いた頃にはもう海はなくなっていました。かろうじて残った神島水道が追加指定という形で天然記念物になっていて、子どもの



繁殖地では野生のカブトガニを見ることができま



生きたカブトガニが間近で観察できるほか、大迫力の恐竜のレプリカや、動く恐竜模型の展示など、ユニークで楽しめる展示が盛りだくさん。

頃この辺へ釣りにきたときに野生のカブトガニを見かけたことがあります。父親が「これは逃がしてやらないけん」と言って放していたのを覚えていますね。笠岡の同級生に聞いても、砂浜を掘ったら卵がたくさん出てきたと言っていました。砂浜、海に流れ出る川、干潟。カブトガニが生息するにはこの三つともがそろうことが必要なんです。そのような場所がこの辺にはなかなかないんです。干拓で神島水道の潮の流れが変わってしまい、昔のように干潟ができなくなってしまいました。流れ出る川もコンクリートで護岸されてしまい、砂浜も痩せてしまっています。今は少なくなりましたが、潮干狩りで浜が掘り返されるといったこともあります。いろいろな要因が重なって、カブトガニの生息に適した環境は急速に減ってしまいました。

研修会やグッズでカブトガニをPR

2億年前から生き続け、リビング・フォッシル（生きている化石）と呼ばれるカブトガニを守りたい。そんな思いから博物館では、1995年から個体の人工飼育と放流に取り組んでいます。卵を抱えている雌が見つかったら、館内の産卵池に放します。この池は海とつながっていて潮が満ち引きするなど、自然界と同じ環境なので、産卵では特に手助けをするといったことはありません。50日くらいたってふ化してからが私たちの出番で、1回冬を越して脱皮すると捕食するようになるので、そこからえさを与え続けていき、翌年の7月に放流しています。放流には一般のお客さんにも参加してもらっています。